みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

New Trends in Hakka Studies in Southeast Asia : Some Perspectives from Singapore and Malaysia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003835

国立民族学博物館研究報告38(1): 17-33 (2013)

研究ノート

東南アジアにおける客家研究の新傾向
――シンガポール，マレーシアを対象として――

河　合　洋　尚*

New Trends in Hakka Studies in Southeast Asia: Some Perspectives from Singapore and Malaysia

Hironao Kawai

漢族の一集団である客家は，19 世紀より，欧米，中国，日本の学者により研究されており，その研究動向は，日本でもよく知られるものとなっている。しかしながら，日本では，それ以外の国々，例えば東南アジア諸国で，客家研究がどのように展開されてきたのかが，まだ十分に把握されていない。筆者の調査によると，近年，特に多くの客家が居住するシンガポールやマレーシアでは，客家と客家研究がますます注目を集めており，その研究成果は，客家団体の活動，博物館での展示などにも活かされている。こうした状況を見据えて，本稿は，シンガポールとマレーシアにおける客家研究の動向を紹介することで，日本ではまだ知られることの少ない東南アジア客家研究の現在を考察する。

The Hakka, an ethnic group of the Han, have been studied by scholars from Europe, America, Japan and China. These studies are well known in Japan. However, Japanese scholars have still not fully caught up with Hakka studies in the countries of Southeast Asia. According to my recent research, some scholars in Singapore and Malaysia, where many Hakka people live, have started to pay attention to such studies. They use academic accomplishments to show the activities of Hakka circles and exhibitions from Chinese museums. This article aims at introducing new perspectives on studies of Chinese overseas, by focusing especially on those conducted in Singapore and Malaysia.

*国立民族学博物館研究戦略センター

Key Words ：Hakka, Oversea Chinese, Singapore, Malaysia
キーワード：客家，華僑・華人，シンガポール，マレーシア

1　客家研究をめぐる概況
2　シンガポールにおける客家研究の新傾向
2.1　初期の客家研究
2.2　客家研究の興隆と展開
3　マレーシアにおける客家研究の新傾向
3.1　半島部をめぐる研究動向
3.2　島嶼部をめぐる研究動向
4　総括と展望

1　客家研究をめぐる概況

客家は，中国[1] 南部をはじめ世界各地の華人社会に広く分布する，漢族の下位集団である。このエスニック集団は，19 世紀半ばまで，中国の文人により断片的に言及されるにすぎなかったが，19 世紀の後半になると，欧米の宣教師により，その歴史や言語，文化が研究されるようになった。

当時，客家は，しばしば土着の漢族と内紛を起こしてきたため，現地では，文明的な漢文化をもたない蛮族であると考えられていた。しかし，欧米の宣教師は，特に広東省における記録や考察を通して，客家が，①中原（古代中国王朝の所在地）にルーツをもつ正統な漢族であること，②それゆえ中原漢族の言語や文化をより良く保存していること，を主張した。こうした見解は，客家を自認する中国のエリート層にも受け入れられており，1905 年に彼らは「客家研究会」[2] を創設して，客家が中原出身の漢族であることを証明しようとした（飯島 2007; Kawai 2011: 52–54）。さらに，1933 年には，清華大学で歴史学と人類学を学んだ羅香林が，『客家研究導論』を出版し（羅 1992），家系図，言語，習慣などの各側面から，上記の「客家中原起源説」を体系的に示した。それにより中国で客家学が誕生した。他方，日本の学者や役人もまた，台湾を植民地化した 1898 年から客家について記述をおこなうとともに，宣教師や羅香林の見解を取り入れた本や論文を，すでに戦前に出版している（河合 2011）。このように，戦前までには，欧米，中国，日本で客家をめぐる研究が豊富になされていた。

戦後から 1990 年代にかけての客家研究は，基本的には，羅香林が示した「中原起源説」を定説としており，それが疑われることはほとんどなかった。羅香林のパラダイムは，客家というエスニック集団が数千年前から存在しており，彼らが中原から南方，さらには海外へ移住する過程を唱えた，いわば本質主義的なものである。しかしながら，1990 年代になると，こうした見解に対して次々と異議が唱えられるように

なる。例えば，中国では，房学嘉（1995）が「中原起源説」を否定し，客家のルーツを南方に求める「土着起源説」を唱えた。また，アメリカでは，客家というエスニック集団は，昔から明確な形で存在してきたわけではなく，近現代の社会的状況により新たに生み出されたとする，構築主義的なアプローチが提示された（Constable ed. 1996）。こうした動きは，1990 年代以降の日本でも生じており，客家のエスニック・カテゴリーが，社会状況に応じて変動しうるとする見解（瀬川 1993）や，近現代以降の経済的需要により新たに形成されたり（蔡 2004; 飯島 2007），拡張したりするという見解が提示された（瀬川・飯島 2012; 河合 2013a）。こうした米，中，日における客家研究の動きについては，筆者が別稿ですでに整理している（河合 2012）[3]。

しかしながら，日本では，アメリカや中国における客家研究の動きはある程度知られているものの，その他の国で客家の研究がどのように展開されているのかについては，意外と知られていない。特に，多くの客家華僑を抱える東南アジアでは，現地の出版社や雑誌から客家に関する研究が出版されているにもかかわらず，日本では，資料の入手が困難であることから，東南アジア諸国における客家研究の動向を知ることが難しい[4]。そうしたなか，筆者は，所属先である国立民族学博物館研究戦略センターの海外研究動向調査として，東南アジアのいくつかの主要な大学，研究機関，図書館，および華人団体を訪れ，客家研究がどのように展開されてきたのかを知る機会を得た。

筆者は，2012 年 6 月 27 日から 7 月 7 日にかけてシンガポールとマレーシアを訪れ，関連の研究に携わる研究者にインタビューするとともに，現地で出版された客家にまつわる本や論文を入手して，帰国後にそれらを整理した[5]。その作業により明らかになったのは，次の二点である。一つは，シンガポールとマレーシアでは，戦前から中国系移民にまつわる多くの研究があるが，彼ら移民は「中国人」や「華僑・華人」といった概念で括られてきたため，客家についての研究はそれほど多くなかったことである。かつては客家または華人としての身分をもつ個別の研究者が，客家の記録や考察を断続的に残してきた程度にとどまっていた。ところが，ここ 10 年間，両国では客家に対する研究熱が高まっており，客家研究関連のプロジェクトも実施されるようになっている。二点目は，シンガポールとマレーシアの客家研究は，客家団体や華僑博物館といった公共の組織／施設と提携することで，研究成果を還元していることである。

以下，本稿では，こうした状況を踏まえて，特に両国における主要な活動や業績を紹介することで，東南アジア客家研究の動向を紹介していくことにしたい。

2　シンガポールにおける客家研究の新傾向

2.1　初期の客家研究

シンガポールは，1963 年 8 月にリー・クワンユー（李光耀）を総統として，分離・独立した，マレー半島最南端の都市国家である。リー・クワンユーが華人であるように，華人の主導で独立した国家であり，その人口比率はシンガポールの約 75％を占める。シンガポール華人の絶対多数は，福建省，広東省などの中国南部からの移民であり，なかでも福建系の漢族が多数を占める。しかし，シンガポールには，潮州系や広東系，そして客家など多数の華人集団が居住している。そのうち，客家は，シンガポールが国家として成立する 150 年前（1823 年）に，この地に応和会館という客家団体を設立した。その後も，シンガポールの客家は，1857 年に茶陽会館，1873 年に豊順会館を，客家のための相互扶助団体として設立している（楊 2002: 192）。

しかしながら，シンガポールの学界において客家が研究の対象となり始めたのはそれほど早い時期ではなく，1963 年の建国以降のことである。もちろん，それ以前にも客家をめぐる記述がなかったわけではない。1854 年のシンガポールの統計文書にはすでに「客人」と「阿爺」という項目があるが，前者は嘉応州（現在の梅州市）からの移民でもあるとも記載されているため（Vaughan 1854: 14），今日の客家を指すと考えられている。また，1929 年にはシンガポール南洋客属総会がつくられるようになるが，初代会長に就任した胡文虎（タイガーバーム社の創始者）は，ことのほか客家研究を重視した。だが，当時はまだ現地に客家の研究がほとんどなかったため，胡文虎は羅香林の『客家研究導論』を重視し，それをシンガポール南洋客属総会および東南アジア各地の客家団体に売っていたのだという（張侃 2004: 75）。

シンガポールで最初になされた客家研究は，1965 年にシンガポール大学（現在のシンガポール国立大学）に提出された Cheah Kam-kooi の学位論文『The Hakka Community in Singapore』（Cheah 1965）であるといわれている（黄 2007: 3–4）。続いて，1969 年にも Hee Qui-shing により，『The Role of the Father in the Upspring of Children among the Hakka Families』と題する学位論文がシンガポール大学に提出された（Hee 1969）。この二つの論文は，いずれも社会学の視点からシンガポール客家のコミュニティや家族を描き出したものである。特に前者は，シンガポール客家の日常生活，年中行事，宗教信仰などから社会関係，客家団体まで広く記述した論文となっており，

当時のシンガポール客家文化を知り得る貴重な資料となっている。また，この論文は，客家団体による教育活動のあり方にも触れており，後者の論文とともに，客家と教育をめぐる先駆的な研究となっている。

このようにシンガポールでは，1960 年代より国内の客家をめぐる人文・社会科学的研究が登場しているが，その後，客家は華僑・華人の一部として言及されるに留まっており，客家を主題とした研究は断続的にしか出されていない。そのなかで，注目に値するのは，1980 年代から 90 年代にかけて，シンガポール客家のエスニシティやアイデンティティについての論考が徐々に出始めたことである。

例えば，シンガポール大学で教授を務めた麦留芳（Mak Lau Fong）は『方言群認同——早期星馬華人的分類法則』を 1985 年に出版し，シンガポールとマレーシアにおける華人の下位集団を論じた。この本は，客家だけに着目しているわけではないが，華人集団内部（福建人，潮州人，広東人，海南人，客家）の人口，職業，社会組織を比較するなかで，シンガポールとマレーシアにおける客家の概況や集団意識のあり方を描き出している（麦 1985）。

さらに，1990 年代後半には，民国期のシンガポールにおける客家アイデンティティの高揚についての論文が，いくつか発表されるようになっている。そのうち，謝左芝は，「由客家人説到創建南洋客属総会」という論文で，シンガポール客属総会が設立された経緯について述べている。この論文によると，シンガポールの一部の客家がシンガポール客属総会の設立を提唱するに至ったのは，中国で客家が誤解されてきたことに抗するためである（謝 1997）。すなわち，シンガポールにおける客家アイデンティティの高揚とその組織の成立には，中国とのネットワークがあったことが示されている。また，中国における客家への誤解に対してシンガポール客属総会が干渉してきた経緯については，葉鐘鈴がシンガポールの学会誌『亜洲文化（Asian Culture）』誌に寄稿した論文（葉 1986）においても描かれている。他方で，1998 年には Too Suat Ling がシンガポール国立大学に，学位論文『The Hakka Identity in Singapore』を提出し，シンガポールで客家アイデンティティが確立され変動してきた経緯について，個人，団体，国家の各レベルからアプローチしている（Too 1998）。

2.2　客家研究の興隆と展開

シンガポールにおける客家の研究は，1990 年代まで研究プロジェクト等の形で組織的・体系的に展開されることはなかった。華僑・華人研究に関心をもつ一部の研究者が，個別に客家の社会・文化・アイデンティティを研究するにとどまり，米・中・

日に比べると，その研究成果も限られてきたといえる。ところが，ここ数年間，シンガポールの客家研究をめぐる状況は大きく変化している。その変化の中心的な存在となっているのは，シンガポール国立大学の中国研究所（Chinese Studies）と民間の客家団体である新加坡茶陽会館（以下，茶陽会館と略称する）である。シンガポールにおいて客家研究が興隆した背景には，この二つの機構の提携と協力がある。

シンガポール国立大学中国研究所と茶陽会館が提携して客家研究を推し進めるようになったのは，2007 年である。ただし，それ以前にも，両者は異なる目的により客家の研究に関心をもっていた。

まず，シンガポール国立大学中国研究所では，一部の教員が，華僑・華人という枠組みではなく，潮州人や客家など，その下位集団に着目するようになっていた。そのうち，客家の研究に取り組んでいたのは，同研究所の主任である黄堅強（Wong Sin Kiong）である。黄は，もともと近代シンガポール，マレーシアの華人社会およびその中国とのネットワークを研究する歴史学者であるが，自身が中国広西チワン族自治区博白県にルーツをもつ客家であることから，シンガポールやマレーシアの客家社会についても関心を抱いていた（黄 2000; 2002）。

他方で，茶陽会館では，中青年層の客家離れが進み，会館が高齢者の集まりになっていることに危機を抱き，客家意識を強く抱く高齢の指導部が，客家の文化やアイデンティティを後世に残さなければならないと考えるようになった。この背景には，シンガポール政府が建国以来，英語や中国語を公用語としたため，中青年層が客家語を忘れ始めていることとも関連している。こうした状況のなか，茶陽会館では，客家の文物や偉業を展示するコーナーを館内につくり，また，リー・クワンユーが客家の出身であることから，彼に関連する展示もおこなった。さらに，茶陽会館はかつて高校の教師であった何炳彪（Ho Phang Phow）を中心として，2002 年に客家文化研究室を館内に設立し，客家の歴史や文化にまつわる研究を促進した。そうしたなか，茶陽会館に出入りしていた黄が一般向けの講義を依頼されて受け持つとともに，黄を通じて，シンガポール国立大学中国研究所と茶陽会館客家文化研究室が提携関係を結ぶようになった[6)]。

茶陽会館は，会の方針として基金を慈善，教育，文化の三つの分野に援助することを定めている。したがって，茶陽会館は，客家文化研究室の客家研究活動に資金援助をなしており，『百年功徳被南邦――望海大伯公廟紀事』（2006 年）や『大埔民居』（2008 年）など，客家文化にまつわる書籍を独自で出している[7)]。また，2005 年 8 月には「客家文化学者交流会」を，2006 年 3 月に「客家学者交流会」を開催した。そ

して，2007 年 4 月にはシンガポール国立大学中国研究所との共催により客家研究発表会をおこない，同研究所との学術提携をおこなうようになった。2007 年から，茶陽会館は，シンガポール国立大学の客家研究にも資金を援助するようになっている。

シンガポール国立大学では，2007 年 8 月に東南アジア華人研究群が成立し，茶陽会館の援助のもと，教員と大学院生がシンガポールの客家にまつわるプロジェクトを組織的，体系的に推し進めるようになった。その研究成果は多岐に渡るが，2007 年以降の主要な業績としては以下の三点が挙げられる。

第一に，シンガポールの客家を主題とした本が，2 冊出版された。中国から刊行された『新加坡客家』（2007 年）と，シンガポール国内から出版された『新加坡客家文化与社群』（2008 年）である。いずれも黄が編者し，シンガポール国立大学の教員と大学院生が中心となって，刊行されている（黄 2007; 2008）。シンガポールの客家を主題とした著作が同国で刊行されたのは，これが初めてである。

第二に，シンガポールの客家をめぐるより多方面の研究が現れた。前述の通り，シンガポールの客家にまつわる研究は，すでに 1960 年代からあるが，家族，教育，コミュニティ，社会団体，及びアイデンティティにまつわる研究が主要であった。それに対し，近年のシンガポールにおける客家研究は，商業，文学，女性などの分野にも広がりをみせている。とりわけ，2007 年以降の研究は，シンガポールと中国の間の人物，商業，教育等のネットワークに着目している点に，新しさがある。

第三に，シンガポールの客家研究は，中国南部の研究に着手し始めている。その先駆けとして，シンガポール国立大学中国研究所の教員と学生が，茶陽会館の資金援助を受けて，黄の引率のもと，「客家の故郷」と呼ばれる広東省梅州市や福建省龍岩市へフィールドワークに出かけるようになっている。従来の研究がシンガポール国内とマレーシアしか視野に入れていなかったことを考えると，大きな進展であるといえる。

3　マレーシアにおける客家研究の新傾向

3.1　半島部をめぐる研究動向

マレーシアは，マレー半島に位置する半島部およびボルネオ島北部に位置する島嶼部等からなる国である。両者は，民族構成も異なっており，島嶼部の多数派がイバン族，カダザン・ドゥスン族などのプロト・マレー系原住民であるのに対し，半島部で

はマレー系が多数を占める。

マレーシアでは，華人はマジョリティでないものの，全人口の約 24％を占める。シンガポールと同じく，マレーシアの華人も中国南部から移住した福建人，潮州人，広東人，海南人，客家から主に構成されている。全体的にみるなら，マレーシアで最も多い華人の下位集団も福建人であるが，島嶼部の東北部に位置するサバ州だけは客家が優勢である。ただし，客家はマレーシアの全土に居住しており，その人口数は約 100 万人であると推測されている（羅 1994: 25）。

このようにマレーシアには客家が少なからずいるが，1990 年代以前，マレーシア国内で客家が主要な研究テーマとなることは限られており，一部の学者が，華僑・華人研究の一環として客家の歴史や社会組織等に言及したにすぎなかった。例えば，マレーシアの寛柔学校（今の南方学院）で教鞭をとっていたことがある歴史学者・許雲樵は，マレーシア華僑の移住史を論じるなかで，客家のマレーシアへの移住についても言及した（許 1976）。また，1981 年には，Leong Kon Kee によりペナン島における客家の歴史が論じられるなど（Leong 1981），いくつかの先駆的な研究が散見される。ただし，管見の限りにおいて，マレーシアの学者が本格的に客家の研究に着手するようになったのは，1990 年代以降のことである。特に，マレーシア半島部の客家をめぐる研究は，2000 年前後から急増するようになっている。マレーシアの研究者による半島部の客家研究は，個人的研究によるものと，組織的研究によるものがある。

そのうち，前者に関して，個別に客家の研究に重視している代表的な研究者は，マラヤ大学中国研究所主任の蘇慶華（Soo Khin Wah）とマレーシア孝恩基金会の王琛発（Ong Seng Huat）である。両者はともに客家ではなく，歴史学や宗教学の立場からマレーシアの華僑・華人について幅広く研究してきた[8)]。だが，後に客家にも着目するようになり，客家の宗教や民間団体に関する研究を展開するようになった（蘇 2010; 王 1998）。なかでも，王は，『馬来西亜客家人本土信仰』（2006 年）と『馬来西亜客家人的宗教信仰与実践』（2007 年）を刊行し，観音信仰，大伯公信仰，三山国王信仰，譚公信仰，拿督公信仰，祖先崇拝，道教，キリスト教，秘密結社など，マレーシア客家の宗教信仰を幅広く考察している（王 2006; 2007）。

他方で，マレーシアでは，半島部の客家をめぐる組織的な研究プロジェクトも開始されている。そのうち最も早く規模が大きかったのは，南方学院の華人エスニシティ文化研究所（Research Institute of Chinese Ethnicity and Culture）による，ジョホール・バル（柔佛）客家の研究プロジェクトである。南方学院は，シンガポールの対岸に位置するジョホール・バルの，民営の高等機関である。ジョホール・バルには，戦前よ

り華人の子弟に教育を施す機関として寛柔小学，寛柔中学（高校を含む）があり，1975 年に寛柔中学の卒業生を受け入れる高等機関として寛柔学校（高専）が成立した。1990 年には，寛柔学校から南方学院となり，事実上は，華人の子弟を中心とする大学として存在してきた[9)]。

南方学院が，客家の研究に着手するようになった背景には，南方学院が華人の子弟を受け入れる民営の大学であることと密接な関係がある。ただし，ジョホール・バルは「小汕頭（スワトウ）」と呼ばれるように，歴史的に潮州人（潮州・スワトウ・揭陽出身の華人）が勢力をもっており，南方学院の設立においても少なからずの潮州人が出資したといわれている。したがって，2001 年に南方学院で中国エスニシティ文化研究所が成立した後，同所の教員がまず取り組んだのは，客家ではなく，潮州人の歴史や文化に関する研究であった。本稿の主旨にそぐわないため，南方学院による潮州人研究については割愛するが，鄭良樹（Tay Lian Soo），安煥然（Onn Huann Jan）ら歴史学出身の教員が中心となり，2001 年から 2003 年にかけて「搜集柔佛潮州人歴史資料合作計劃」（ジョホール・バル潮州人の史料収集に関わる合同プロジェクト）を開始した[10)]。

南方学院の教員は，ジョホール・バルの潮州人にまつわる研究が一段落すると，次は 2004 年から 2006 年にかけて，ジョホール・バルの客家にまつわるプロジェクトを開始した。このプロジェクト名は「搜集柔佛客家人歴史資料合作計劃」（ジョホール・バル客家の史料収集に関わる合同プロジェクト）といい，ジョホール・バル客家公会を始めとする客家団体や関係者から 15 万リンギット（約 450 万円相当）の資金援助を受けている[11)]。このプロジェクトは，上述の鄭や安を始めとする南方学院の教員および学生により主に担われ，ジョホール・バルの客家団体や民間で聞き取りを行うことで，ジョホール・バル客家のルーツ，分布，経済，民俗，社会組織などを明らかにした。その調査手法は，ジョホール・バルの客家にまつわる文献資料を収集するとともに，現地の客家を訪れ，ライフヒストリーを聞き取るといったものである。2004 年 6 月にプロジェクトが始まってから 2006 年 4 月に終了するまで，30 回以上にわたる客家団体への訪問と 60 回以上にわたる民間でのフィールドワークを実施し，集めたライフヒストリーは 80 以上にものぼるという（安・劉 2007: 168）。その調査成果の一部は，2007 年にジョホール・バルから出版された，『柔佛客家人的移植與拓墾』にまとめられている。

このように南方学院が客家研究のプロジェクトを開始したのは，シンガポール国立大学よりも早く，しかも綿密な調査により貴重な第一次資料を残している。また，南

方学院のプロジェクトでは，ジョホール・バル客家公会の研究をするなかで，この客家団体と中国客家地域とのつながりについても，報告を残している（安・劉 2007）。例えば，安煥然は，ジョホール・バル客家公会による内部分裂が，中国福建省の寧化県における「客家の故郷」建設運動に拍車をかけていた事実を指摘しており，中国客家社会とマレーシア客家社会の同時代的な影響関係について明らかにした（安 2010）。

南方学院は，さらに 2006 年より海南人にも同様の調査を展開しており，客家だけに限らず，現地で「五帮」と呼ばれる華人の下位集団（福建人・広東人・潮州人・海南人・客家）の研究を進めている。彼らが収集した調査資料は，学術的な資料として用いられるだけでなく，公共にも還元されるよう期待されている。例えば，ジョホール・バルでは，市内にジョホール・バル華族歴史文物館が 2006 年にオープンし，ジョホール・バルの華人の歴史や「五帮」の文化にまつわる文物が展示されている。この博物館は南方学院と経営上の関係があるわけではないが，展示の際には南方学院の教員がアドバイスするなど，客家団体の援助により実施されたプロジェクトの成果が社会に還元されるようになっている。

シンガポールと同様，マレーシアの客家団体が近年，現地客家の研究を推奨し始めていることは，注目に値する。マレーシアの場合，2004 年 10 月 23 日に実施された第一回客家学術シンポジウムの席上で，客家団体が客家研究の援助をする必要性が提起された後，マレーシア客家学研究会が発足した。この研究会は，マレーシア客家公会に属す機関の一つであり，マレーシア国内の客家研究に対する支援をおこなっている。また，同研究会は，客家にまつわる概説書を刊行するなど，大学や研究機関の学者と提携することで，マレーシアの客家研究を促進している。マレーシアにおいても，客家の研究が学術と公共機関が密接にかかわっている状況にある。

3.2　島嶼部をめぐる研究動向

マレーシアの島嶼部は，前述のように半島部とは民族構成が異なっている。華人内部においても，サラワク州のマジョリティこそ半島部と同じ福建人であるが，サバ州では，半島部とは異なり客家が華人人口の過半数を占める。

島嶼部の華人・華人研究は，これまでマレーシア国内外の，様々な分野の学者により進められてきた。そのなかで，一部の研究者は客家にも着目し，他の華人集団との比較において客家の生業や社会組織などについて論じてきた（Fortier 1964; Han 1971）。しかし，その研究の多くはアメリカで発表されており，マレーシア国内の研

究者による客家研究は，上述の Leong のような先駆的研究があるものの，1990 年代より増加の傾向を見せるようになっている。1990 年以降，田英成（1991; 1999）によるサラワク客家の研究など，マレーシアでも島嶼部の客家に関する研究が促進されるようになった。特に，客家人口の多いサバ州では，Danny Wong（黄子堅）と Zhang Delai（張徳来）を筆頭に，多くの客家研究が刊行されるようになっている。

Wong と Zhang は，ともにサバ州出身の客家であり，二人は親戚関係にあるのだという[12)]。Wong は歴史学，Zhang は宗教学の出身であるが，両者はともにサバ州の歴史について考察をおこなっている。特に，Wong は，『The Translation of an Immigrant Society: A Study of the Chinese of Sabah』（1998 年）と『Historical Sabah: The Chinese』（2005 年）で，客家が中国からサバ州に移住した歴史について，史料の検証を通して明らかにしている（Wong 1998; 2005）。また，彼は，後者の本で「初期の客家ビジネスと企業」という章を設け，サバに移住した後の客家の商業史についても触れている（Wong 2005: 27–34）。他方で，Zhang もサバ客家の移住史に触れているが，著書『The Hakkas of Sabah』では，それ以外にも，社会組織，生業，宗教・信仰，政治経済などの各方面から，サバの客家を紹介・解説している（Zhang 2002; 張徳来 2002）[13)]。さらに，Zhang は，『The Hakka Experiment in Sabah』という本を 2007 年に出しており，コタキナバルの東部に位置する客家村とその移民史について，より詳細なデーターを駆使しながら論じている（Zhang 2007）。

現在，マレーシアの学者によるサバ客家研究は，特に Wong と Zhang の二人によって推進されているが，その他にもサバ神学院の院長である涂恩友（Thu Enyu）がサバ州の客家とその他のエスニック集団との関係について論じるなど（涂 2007），いくつかの論文が散見される。サバ神学院は，Zhang の著書を刊行するなど，サバ州における客家研究の一つの拠点となっている。他方で，サラワクでも現地の客家について研究が進められるようになっている。例えば，アメリカで学位を取得した房漢佳（Fong Hon Kah）は，サラワク客家の歴史や現状について包括的な紹介をした（房漢佳 1998; 2003）[14)]。

ただし，マレーシアの人文・社会科学者は，マレーシア国内の客家については日増しに着目するようになっているが，中国や世界の客家について概説的に紹介するにとどまり，他国において一定期間のフィールドワークを展開し，研究業績として提示することはほとんどない。しかし，台湾の高雄師範大学で教鞭をとるマレーシア出身の利亮時（Lee Leong Sze）は，シンガポールの華人についての本のなかで，客家についても触れている（利 2009）[15)]。このように，現時点においては，マレーシアの絶対的

多数の客家研究者は華人であり，しかも彼らの絶対的多数がマレーシアかシンガポールを研究するという状況にある。

4　総括と展望

以上，本稿では，主にシンガポールとマレーシアの人文・社会科学を例として，東南アジアにおける客家研究の動向を紹介してきた。本稿の記述より明らかになったことを再度整理すると，以下のようになる。

第一に，シンガポールにおいてもマレーシアにおいても，中国系移民は華僑・華人という枠組みで研究されており，1990 年代に入るまで，客家を主要なテーマとした研究は限られていた。シンガポールでは，1963 年の建国直後から社会学的・歴史学的な研究が断片的に登場しているが，客家研究が急増するのは 21 世紀以降である。こうした動向は，マレーシアも似ており，前世紀末より，華人籍の学者がようやく組織的に客家に着目するようになっている。両国では，21 世紀に入る頃から客家研究熱が高まったのだといえる。

第二に，シンガポールとマレーシアの学者による客家研究は，主に両国の領土内を主要な対象としている。ただし，シンガポールでもマレーシアでも，「祖国」である中国東南部に着目するようになっており，両者の歴史的，現代的なネットワークや影響関係について論じる研究も現れている。現在の日本や中国の客家研究は，中国から東南アジアへの歴史的な移民について考察することはあっても，近代的な交通手段（飛行機など）や情報網（インターネットなど）が発達した現在の，国境を超えた文化的な影響関係をあまり論じてはこなかった。シンガポールやマレーシアで客家の同時代的な越境ネットワークの研究が現れていることは，世界中の客家研究を考慮しても興味深い動向である。

第三に，非常に重要なことは，シンガポールとマレーシアの客家研究が，学術の殻に閉じこもることなく，民間との密接な関係のうえで成り立っていることである。上述したように，シンガポールの客家研究は，シンガポール国立大学と茶陽会館の提携のもと新たな展開をみせるようになっており，さらに他の研究機関や華人団体を巻き込む形で客家研究熱を加速させるようになっている。他方で，マレーシアも同様に，南方学院の客家研究プロジェクトがジョホール・バル客家公会の協力と資金援助によって成り立っているなど，学術機構と民間組織との提携関係がみられる。また，学術機構による研究成果は，華人団体の記録や情報整理に役立てられたり，博物館の展

示に役立てられたりしている。

さらに最近は，学術機構と民間組織の提携関係が，よりグローバルに結ばれるという，新たな局面を迎えている。例えば，2012 年 6 月 30 日にシンガポールの茶陽会館で開催された「国際大埔客家文化シンポジウム」では，同館だけではなく，シンガポール国立大学中国研究所，台湾僑光科技大学，および台中市石崗郷区・東勢区の民間団体との提携によって開催された。また，このシンポジウムの席上では，シンガポール，マレーシア，台湾，中国の学術機構と客家団体が協力し，輪番で毎年，学術シンポジウムを開催していくことが提案された。このように，シンガポールとマレーシアでは，学術機構と客家団体とが手を取り合い，よりグローバルな形での客家研究が促進されるようになっている。

ただし現時点で，シンガポールとマレーシアの客家研究が抱えている課題もいくつかある。まず，両国では，ここ十数年の間にようやく客家研究が組織的・体系的に展開したこともあり，対象地域と研究手法が限られている。つまり，両国の研究者は大部分がシンガポールやマレーシアの研究に従事する傾向が強く，研究分野も歴史学，文学，言語学などに偏っている。特に人類学者による貢献がほとんどないため，人類学的な手法に基づく長期のフィールドワークや海外研究が限られている。次に，上述の通り，両国では学術機構と民間団体が密接な関係にあるため，学術の社会的な貢献が容易である反面，民間客家団体のイデオロギーに沿わない研究が展開しにくい。それゆえ，冒頭で示したような構築主義的アプローチが近年の客家研究で進むなか，両国が果たしている貢献は乏しい。例えば，シンガポールやマレーシアにおいて，現地の一部の華人がいかに客家としてのアイデンティティを獲得していったのかを，近現代以降の社会経済的条件のなかで論じる研究は，管見の限り存在していない。シンガポールでは，1990 年代に客家アイデンティティをめぐる研究が浮上したものの，近年は減少している傾向を見ると，民間団体における客家のアイデンティティを揺るがす議論ができなくなったのではないかと推測される。シンガポールとマレーシアの客家研究が，今後このような課題をいかに見据えて展開していくのかは，注目に値する点である[16)]。

謝　　辞

本稿は，2012 年度から 2013 年度にわたって国立民族学博物館研究戦略センターの経費で実施した，海外研究動向調査の成果の一部である。各機関に訪問しインタビューするなかで，多くの方々にお世話になった。特に，シンガポール国立大学の黄堅強先生，マレーシア南方学院の

安煥然先生，同マラヤ大学の蘇慶華先生には，詳細に動向を教えていただくことができた。研究動向調査の機会を与えていただいた国立民族学博物館の先生方，台湾橋光科技大学の陳瑛珣先生，呉賢俊先生を含め，お世話になった全ての方々に，この場を借りてお礼を申し上げたい。

注

1）　本稿では，便宜的に中国本土（Mainland China）を中国と略称する。
2）　丘逢甲ら客家出身のエリートにより，客家が中原にルーツをもつ漢族であることを証明するため結成された。
3）　拙稿（2012）では，米・中・日だけでなく，台湾の客家研究による構築論的アプローチに紹介している。ただし，この論文は，台湾における客家研究の動向を網羅したものではない。特に 1990 年代以降，台湾では数多くの客家研究が生み出されている。とりわけ，文化産業，グローバル化などの分野に強い関心を払っているだけでなく，中国，東南アジア，オセアニア，日本など世界中の客家についても研究を進めている。台湾における客家研究の動向については，別の機会に紹介することにしたい。
4）　同様の傾向は中国にも該当する。筆者は，2008 年 3 月から 2010 年 1 月まで中国広東省の嘉応大学で講師として勤務していたが，その際にシンガポールやマレーシアの学者がしばしば来訪してきたため，これらの国で客家研究が進められていることは知っていた。しかし，これらの国で客家研究がどのように展開されているのかについての情報は，中国でも入手することが困難であった。
5）　筆者は，ベトナム，タイ，インドネシアなど他の東南アジア諸国における研究機関をまだ訪問していない。東南アジア全般の状況については，シンガポールとマレーシアの研究機関における聞き取り調査，及びシンガポールの図書館における検索を通して情報を収集した。
6）　2012 年 6 月 30 日に黄堅強氏と何炳彪氏の両者より伺った話に基づいている。
7）　いずれも新加坡茶陽会館客家研究室から出版されている非売品である。
8）　蘇慶華氏と王琛発氏の両者から伺った話に基づく。蘇は，2011 年 12 月に台中市石崗郷で開催された国際シンポジウム，及び 2012 年 7 月にマラヤ大学中国研究所で会い，話を伺った。蘇は，龍岩市にルーツをもつが，自らは客家ではないと述べていた。王は，中国で何度も会ったことがあるが，海南人であるという。
9）　マレーシアのブミプトラ政策（マレー人優遇政策）の影響により，ごく最近になるまで，南方学院（Southern College）は，大学として国から認可されてこなかった。この高等教育機関が客家研究プロジェクトを実施した際，まだ南方学院を名乗っていたため，本稿では一貫して南方学院と記している。筆者が 2012 年 7 月に訪れた際には大学として「昇格」する準備を進めている段階にあり，現在では南方大学学院（South University College）を名乗っている。
10）　その研究成果は，2003 年に『柔佛潮人史料合作計劃工作紀行』という名の報告書にまとめられている。ジョホール・バルの潮州人に関するライフヒストリーを集めた貴重な資料集となっている（鄭 2003; 2004）。
11）　この客家研究プロジェクトの出資者および調査参加者の詳細は，安・劉（2007）に記載されている。
12）　2012 年 8 月，文部省科学研究費『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の社会統合に関する社会人類学的研究』（首都大学東京教授・伊藤眞代表）の調査でマレーシアサバ州を訪れた際，Zhang Delai より直接話を伺った。本稿のマレーシア島嶼部の研究動向に関する部分は，国立民族学博物館の研究動向調査だけでなく，本科研プロジェクトの調査より得られた情報も多い。サバ州において調査をする機会を与えていただいた伊藤眞教授に感謝を申し上げたい。
13）　コタキナバルで書店を構えていたある主人によると，Zhang の『サバの客家』は比較的売れ行きがよかったのだという。著者である Zhang 自身も，自身の本は比較的売れたと述べており，その要因として，客家としてのアイデンティティをもつ中高年の華人が自己のルーツを確認し，子や孫にも伝える目的で買うことが多かったと自己分析していた。
14）　ごく最近になって Kee Howe Yong がサラワクの客家をめぐる著書［Yong 2013］を刊行した。

15）なお，利亮時および同じマレーシア華人である林開忠は，2013 年度より筆者と日本客家の共同調査を実施している。その他，サラワク大学の Daniel Chew も最近オーストラリアの客家を研究しはじめている。マレーシア籍の学者による，新たな研究動向であるといえる。

16）シンガポールとマレーシアは，東南アジアで最も客家研究が盛んな国になっていることには変わりがない。東南アジアで最も多くの客家が居住するインドネシアでは，同国の客家をめぐる著作（何 1956; Poerwanto 2005）など一部の業績こそあるが，客家をめぐる研究はまだ萌芽的な段階にある。また，ベトナムでは，客家がガイ族という少数民族にも認定されているが，それをめぐる調査・研究が国内ではほとんどないと聞く。今後は，ベトナム，タイ，インドネシアなどにおける客家研究の詳細な動向も調べる必要はあるが，現段階では，東南アジアにおける客家研究の中心はシンガポールとマレーシアであると断言できそうである。他方で，オセアニアでは，客家を主題とした研究が蓄積され始めている。筆者は，2013 年 2 月 4 日から 18 日にかけて，国立民族学博物館の海外研究動向調査により，オーストラリア国立大学，オーストラリア歴史華人博物館，フィージーの南太平洋大学などで，オセアニアの華僑・華人研究にまつわる動向調査をおこなった。調査の結果，オセアニアで客家人口の多いタヒチでは早くから現地の客家にまつわる記録が残されていること，オーストラリアでは華僑・華人研究が注目を集めるなか，客家に関する研究が徐々に現れていることが明らかになった。オセアニアの華僑・華人研究と客家研究については，稿を改めて論じることにしたい。

文　　献

〈日本語文献〉

飯島典子
2007 『近代客家社会の形成──「他称」と「自称」のはざまで』風響社。

河合洋尚
2012 「『民系』から『族群』へ──1990 年代以降の客家研究におけるパラダイム転換」『華僑華人研究』9: 138–148。
2013a「空間概念としての客家──『客家の故郷』建設運動をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』37(2): 199–244。
2013b『景観人類学の課題──中国広州における都市環境の表象と再生』風響社。

蔡驎
2004 『汀江流域の地域文化と客家──漢族の多様性と一体性に関する一考察』風響社。

瀬川昌久
1993 『客家──華南漢族のエスニシティとその境界』風響社。

瀬川昌久・飯島典子編
2012 『客家の創生と再創生──歴史と空間からの総合的再検討』風響社。

〈中国語文献〉

安煥然
2010 「馬来西亜柔佛客家人的移植形態及其認同意識」庄英章・簡美玲編『客家的形成与変遷（下冊）』pp. 887–910, 新竹：国立交通大学出版社。

安煥然・劉莉晶編
2007 『柔佛客家人的移植與拓墾』柔佛：南方学院出版社・新山客家公会。

房漢佳
1998 「砂拉越客家社会的歴史与現状」『東南亜区域研究通訊』6: 116–135。
2003 「恵東安人移居砂拉越的歴史与現状」『客家与中原文化国際学術研討会論文集』pp. 395–419，鄭州：中州古籍出版社。

房学嘉
1995 『客家研究探奥』香港：中流出版社。

何　吟
1956 『客族文献砕金』耶加達天声日報社。
黄堅強
2000 「客籍領事梁碧如与槟城華人社会的帮権政治」徐正光編『第四届国際客家学研討会論文集――歴史与社会経済』pp. 401–426，台北：中央研究院民族学研究所。
2002 「客席領事与槟城社会」鄭赤琰編『客家与東南亜』pp. 213–227，香港：三聯書店。
黄堅強編
2007 『新加坡客家』桂林：広西師範大学出版社。
2008 『新加坡客家文化与社群』新加坡：新加坡国立大学中文系。
河合洋尚
2011 「二戦前日本的客家民族理解研究」『広東民族学会研討会論文集』pp. 1–14，梅州：嘉応学院。
利亮時
2009 『一個消失的村落――重構新加坡徳光島走過的歴史道路』新加坡：新加坡国立大学出版社。
羅香林
1992 『客家研究導論』上海：上海文芸出版社（原著 1933 年）。
羅英祥
1994 『漂洋過海的客家人』開封：河南大学出版社。
麦留芳
1985 『方言群認同――早期星馬華人的分類法則』台北：中央研究院民族学研究所。
蘇慶華
2010 『蘇慶華論文選集第三巻　馬新華人研究』雪蘭莪：聯営出版。
田英成
1991 『砂拉越華族社会構造与形態』吉隆坡：吉隆坡中華大会社資料研究中心。
1999 『砂拉越越華人社会的変遷』詩巫：砂拉越華族文化協会。
涂恩友
2007 『従文化釈経角度探索馬来西亜的沙巴族群身分』台湾：東南亜神学教育協会。
王琛発
1998 『槟城客家二百年』吉隆坡：槟榔屿客属公会。
2006 『馬来西亜客家人本土信仰』吉隆坡：馬来西亜客家公会聯合会。
2007 『馬来西亜客家人的宗教信仰与実践』吉隆坡：馬来西亜客家公会聯合会。
謝佐芝
1997 「由客家人説到創建南洋客属総会」『東南亜研究』6, pp. 58–59。
許雲樵
1976 「客家人在東南亜」『槟榔屿客家公会四十周年記念刊』pp. 363–379，槟城：槟榔屿客家公会。
楊鶴書
2002 「客家人適応方式転変与対他們対馬来西亜早期開発的貢献」鄭赤琰編『客家与東南亜』pp. 187–197，香港：三聯書店。
張徳来
2002 『沙巴的客家人』亜庇：沙巴神学院。
張侃
2004 「従社会資本到族群意識――以胡文虎与客家運動為例」『福建論壇』（人文社会科学版）1: 73–77。
鄭良樹編
2003 『柔佛潮人史料合作計画工作紀行』柔佛：南方学院。
2004 『柔佛州潮人拓殖発展史稿』柔佛：南方学院出版社。
葉鐘鈴
1986 「猺獞即今客家――星州客属総会与上海〈逸経〉文字案始末」『亜洲文化』（新加坡亜洲研究学会）8: 48–55。

〈英語文献〉

Cheah, K. K.
1965 *The Hakka Community in Singapore*. Academic Exercise, Department of Social Studies, University of Singapore.
Constable, N. (ed.)
1996 *Guest People-Hakka Identity in China and Abroad.* University of Washington Press.
Fortier, D. H.
1964 *Cultural Change and Chinese Agriculture Settlement in British North Borneo*. Doctorate of Philosophy Dissertation, Columbia University.
Han, S. F.
1971 *A Study of the Occupational Patterns and Social Interaction of Overseas Chinese in Sabah, Malaysia*. University of Michigan, PhD Thesis.
Hee, Q. S.
1969 *The Role of the Father in the Upbringing of Children among the Hakka Families*. Department of Social Work and Social Administration, University of Singapore.
Kawai, H.
2011 The Making of the Hakka Culture: The Social Production of Space and Landscape in Global Era, *Asian Culture* 35, pp. 39–56. Singapore Society of Asian Studies.
Leong, K. K.
1981 The Chia-ying Hakka in Penang 1786–1941. *Malaysia in History* 24: 39–48.
Too, S. L.
1998 *The Hakka Identity in Singapore*. Honours Thesis, Department of Sociology, National University of Singapore.
Wong, D.
1998 *The Translation of an Immigrant Society: A Study of the Chinese of Sabah*. London: ASEAN Academic Press.
2005 *Historical Sabah: The Chinese*. Kota Kinabalu: Natural History Publications.
Vaughan, D.
1854 Notes on the Chinese in Penang. *Journal of Indian Archipelago and Eastern Asia* 8: 1–27.
Yong, K. H.
2013 *The Hakkas of Sarawak: Sacrificial Gifts in Cold War Era Malaysia*. Toronto: University of Toronto Press.
Zhang, D.
2002 *The Hakkas of Sabah*. Kota Kinabalu: Sabah theological seminary.
2007 *The Hakka Experiment in Sabah*. Kota Kinabalu: Sabah theological seminary.

〈インドネシア語文献〉

Poerwanto, H.
2005 O*rang Cina Khek dari Singkawang*. Depok: Komunitas Bambu.